

ふれあい

大代地区コミュニティ推進協議会

事務局：大代地区公民館 ☎ 364-8442

文月の大代

大代南 渡邊 巖

麦秋の六月も過ぎ、梅雨明けを待ちながら麦刈りの時期を迎えます。

昔は大代にもあちこちに麦畑が広がって、田植え後の重要な農作業でした。刈り取った麦はハセに架けて乾燥させ、晴れた日が四、五日も続くと麦がすっかり乾燥した頃を見計らって麦焼きです。梅雨も明け、カンカン照りの陽射しの下でハセの麦を一把ずつ焼いて穂を落とすのです。

穂先に火をつけると禾がメラメラと燃え、穂首のところから穂がポタリと敷いてある筥の上に落ちるのです。

穂が落ちたら、焼いている麦藁を桶に汲んである水の中にズブツと入れて火を消し、離れた場所に投げてやるのです。

こう書くと造作無い仕事に思えるでしょうが、焼けつく様な夏の陽の下で麦焼きです。その上、火を使うので素っ裸ではできません。汗の吹き出した顔には麦の焼け埃や煤がついて真っ黒、喉はカラカラ。本当に酷い仕事でした。

そんな訳で、麦焼きは夜の方が太陽が照らないだけ楽だろうと、大概夕方から始め、夜の九時過ぎ頃まで続けられました。雨が近い様な夜などは家族総出で、十時になっても十一時になっても麦焼きが続けられるのです。

あいさつは心のふれあい

出会った人と あいさつしましょう

折角穂った麦が雨で発芽し、品質・収量が落ちては大変ですから。

丑湯治

夏の土用の丑の日には「丑湯治」といって、荷馬車に布団や食料品等を積み、今の利府町の沢乙温泉や道珍坊温泉などの湯治場へ出掛けたものです。

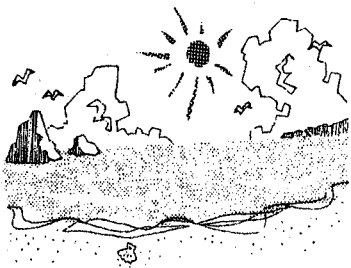
また此の日は薬草を採る日とされ、草が一年中で最も茂り、此の日に採ればどんな草でも薬になるなどといわれ、種々の草を採って袋に入れ、風呂に浸して「草湯」と云って入浴しました。

もう一つ、昔から鱈鮓や泥鰌など長いものを食べる習慣が此の日にはありましたが、鰻が多く獲れた大代では「土曜鰻」の歴史は古いようです。

海の記念日

現在は国民の祝日『海の日』がありますが、戦時中に定められた『海の記念日』は七月二十日でした。明治天皇が北海道・東北御巡幸で塩釜港に上陸された日です。

此の頃になると夏休みが近いこともあって、多賀城小学校では児童と先生方が一緒に菖蒲田浜海水浴場へ泳ぎに行つたものです。



視察研修に参加して

大代東 白濱 宣子

やがて、必ず起こると言われている宮城県沖地震、不安な気持ちの中六月十四日(月)積水ハウス色麻工場見学に参加しました。地震に対応するマジックカーペット、軸組起震、免震、耐力壁比較、外壁ロッキング、色々なコーナーどれを体験しても私達が考える恐ろしさを遙かにクリアしてくれる素晴らしい体験設備でした。

次に、宮城県林業試験場「森林を増やし、育て、活かす」と言うキーワード、広々とした敷地の中に、地味な仕事である由、大変さを感じました。

又、昭和万葉の森、この日はとても天気がよく、清々しい風が、身体全体に感じる気持ちのいい素晴らしい散策研修でした。

この様な、すばらしい地域の研修会、皆さんも是非参加してはいかがでしょう。心地よい汗を流す一日でした。企画をした皆様ご苦労様でした。

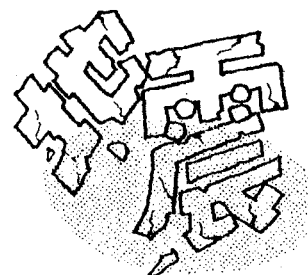
大代中区の方へ

避難訓練実施のお知らせ

- ◆ 開催日 七月十日(日)
- ◆ 時間 九時三十分～十二時
- ◆ 場所 東小学校校庭

詳細は案内文書(各家庭配布) 避難訓練に参加しましょう をご覧ください。

大代中町内会長 小野 菊郎



研修会にちなみ(俳句)

大代西 藤田 遊子

約束の万葉の森遠郭公
蒼穹の天衣の城のありにけり
蕉翁の辿りし道やあゆめ花
すめろきの万葉の森風薫る
梅雨晴間主峰貌出す七つ森
聳え立つ大衡城や雲の峰
新緑の万葉の森深呼吸
睡蓮のその葉に花の大きかり

俳句

大代西 松浦 富雄

樹影踏み鈴登り来る登山口
郭公に故郷近くなりけり
意気込みて滴る山に踏み入りぬ
不動尊祈る真清水賜わりぬ
アカシヤの香を身纏いわが家まで
笠神西区 本郷 勝子
水色の蚊帳の中にてスローライフ
雨の朝滴るような海辺町
目にまぶし青葉若葉のアウトドア
雲きれてパラセイリング初夏の海
鈴鳴し小雨の中のチャグ馬こ

祝儀 お見舞いは 三千元を限度にし お返し物はしなないようにお互い気を配りましょう

日本への帰路 (No.三四)

大代南 後藤 清一

想えば北満の広野のはてに玉碎部隊と見捨てられ、戦後はシベリヤの流刑地で奴隷生活長い捕らわれの生活に望郷の念は募り、毎日を千秋の想いで待ち続けた。何度目かのダモイだ又選外だろうと諦めたが、呼ばれた我が耳を疑った。勿論とび上がった前にでる。

自分の姿を別人の様に思えた。自身を忘れて有頂天になったのは、この瞬間だけで二度とこんな体験は味わえないだろう。入ソ以来いゝんな想いが走りいよいよ当日が来る。岸壁を少し離れ船尾に日章旗をあげ黒煙をはいている。でかい煙突のサイドには緑十字のマークが鮮やか・病院船高砂丸である。スコラダモイ。こんな言葉何度聞かされたか知れない。始めはそれを信じ泣いて喜んだものだ。しかし何時まで待ってもダモイは来なかった。

あの終戦直後東京スコラダモイと騙され広漠としたツンドラ地帯を昼となく、夜となく走り続けた、あの捕虜輸送列車の中で俺達は何を考えていたのか、規則正しいレールの響きを聞きながら、不安と疲れに腰を下ろしウトウトと寝こんでしまう。所がそのまま永久の眠りに着く者もいた。死んで行った者、生き残った者とは、ほんの紙一重しかなかった。我々は生き残れる為にあらゆる努力を払った。少々うち汚ない事をして必ず生きの

びてやるぞと何時も思っていた。人間らしく清く正しくなんて奇麗事を唱えていては、あの異様な境遇を生きる事はできなかった。生きてゐるにはゴマもすった。妥協もした争いもした。そんな過酷な厳しい中でも同胞の死を悼む事さえ忘れてしまったら我々は最早や人間と云うより餓鬼の心でしかなかったろう。我々は生き残った者は時々死んで行った友を羨ましく思う事があった。いいよな一もうこれで苦しむ事もないしな」と思っていたのである。彼等の靈魂は我々より先に故郷に飛んで帰ったに違いないと思つた。魂だけとなつても早く日本に帰れるならこんな処で苦しみ続けるより、ましかも知れないと思つた。

今でも不思議に思うのは人間には死相の様なものが必ずある。顔を見るだけで「アツこの男もう近いと感ずる事がある。すると彼は遠からず死んで行った。

帰国を目前にしながら亡くなった友に最後の別れをと墓参を申し出たが、許されなかった。仕方なく岸壁の隅で全シベリヤに眠る友に両手を合わせ安らかな眠りをと祈る。

星の夜の決断

大代南 星 繁子

季節はめぐりもう新緑の節と云うのお正月の話で、アンバランスかも知れないが、私にはどうしても忘れられない事がある。

今年の冬は雪も多く寒さも厳しい、そんな一月五日の事である。我が家には九十九才の母が居り最近が高齢と高血圧で、今まで利用していたショートステイ老人短期宿泊施設が利用できなくなり他施設を探したが受け入れてくれる処はなかった。仕方なく昨年の十月から自宅のみの介護となり頑張つては見たが二十四時間体制では、とても良い介護はできず朝夕のヘルパーさんのサーピスを利用し子供達の協力も得ながらの毎日だったが、朝夕の人の出入りと、何時何が起るかもしれない緊張感や夜中の介護で身も心もへとへとだった。周りのケアマネージャーさん・ヘルパーさん家族など心配し必死で探してくれた結果長期宿泊の受入れ施設が見つかり進められたが自宅願望の強い母を長期に預かる事はできない、自分が倒れる迄、自宅介護しようと思つた。

その夜も日課の十一時半に母の見回りも終わり布団に入るのは何時も十二時床に入つても一寸とした物音にも目が覚め安眠は出来ない。外のあまりの静けさに屋外に出て見た地面は凍りつき、月の光が反射しピカピカ光って居た。ふと空を見上げると高く澄んだ空に満天の星が輝き寒さも忘れ「ああこんな美しい空見た事がない」と見入つていつの間にか星が父母の顔になり姉が叔母達が従弟が旅立った故郷の友達が揃つて「もういいよ、もういいよ」とサインを送つてなかなかの様に見える。我に返つた私はその時「ああもういいんだ。私が倒れたら誰か母を看取るのだろうか。」

子供達だけに責任を負わせるわけにはいかない」と思うと急に体の力が抜け長期宿泊の利用を決断した。翌朝を待つて「決断したよ」と子供達に話したら早速母の前で私の体調を説明し長期宿泊をお願いした。あれ程自宅願望が強く高血圧もその為なので返事はと、息を飲んで待った。

不本意のままでは、血圧を上げ命取りになりかねないので！しばらくして母は「いいよ泊まりに行くよ」と納得して返事をしてくれた。介護度四の母の決断だった。以来四ヶ月今は無事にグループホームで生活して居り一ヶ月に一回の外出は坂病院の診察で、おしやれをして帰りはドライブがてらの外食四月には塩釜神社の桜を見ながら、おさんご茶のだんごをペロリと食べ家に帰りたいとは一言も云わずにグループホームに帰った。さすが明治の人と感心したり感謝したり何時まで続くか先は見えない幸せだが相手を思いやり一日一日を大切に過ごそうと思つていきます。

無理をして自宅介護だけが良い介護ではなく、それぞれの事情に合わせ自他共に両立する方法でサーピスを利用する事は母にとつても悪い事ではないと信じてます。

とサインを送つてなかなかの様に見える。我に返つた私はその時「ああもういいんだ。私が倒れたら誰か母を看取るのだろうか。」

子供達だけに責任を負わせるわけにはいかない」と思うと急に体の力が抜け長期宿泊の利用を決断した。翌朝を待つて「決断したよ」と子供達に話したら早速母の前で私の体調を説明し長期宿泊をお願いした。あれ程自宅願望が強く高血圧もその為なので返事はと、息を飲んで待った。

不本意のままでは、血圧を上げ命取りになりかねないので！しばらくして母は「いいよ泊まりに行くよ」と納得して返事をしてくれた。介護度四の母の決断だった。以来四ヶ月今は無事にグループホームで生活して居り一ヶ月に一回の外出は坂病院の診察で、おしやれをして帰りはドライブがてらの外食四月には塩釜神社の桜を見ながら、おさんご茶のだんごをペロリと食べ家に帰りたいとは一言も云わずにグループホームに帰った。さすが明治の人と感心したり感謝したり何時まで続くか先は見えない幸せだが相手を思いやり一日一日を大切に過ごそうと思つていきます。

無理をして自宅介護だけが良い介護ではなく、それぞれの事情に合わせ自他共に両立する方法でサーピスを利用する事は母にとつても悪い事ではないと信じてます。